

色相対比

色相対比によるコントラストは、デザインに力強さと華やかさを加えます

「色相対比」とは、異なる色相の色を組み合わせたときに生まれる対比効果により、鮮烈なコントラストを生み出す手法です。色相の違いによる対比効果は、色相環で遠い位置にある色の組み合わせほど強くなります(図1)。色相対比の中で最も強い色の組み合わせは、色相環で対向の位置にある「補色」関係の配色です(図2)。

補色関係の配色で注意しなければならないのが、彩度の高い補色を組み合わせた場合に発生する、色と色との境界に別の色がちらついて見える「ハレーション」という現象です(図3)。ハレーションは色の残像現象によって引き起こされるものですが、見る人の目を疲れさせ、文字やグラフィックを見づらいものにしてしまうため、どちらかの色(あるいは組み合わせ

る両方の色)の彩度を下げ、避けるようにしなければなりません。

また、異なる色相の色を組み合わせる場合におきたいことがもうひとつあります。どんな色でもそうですが、色は組み合わせる色によって見え方が変化します。明度の高い色と組み合わせれば、実際の色よりも明度が低く見えます。逆に明度の低い色と組み合わせれば、実際の色よりも明るく見えるものです。同様に異なる色相の色を組み合わせた場合は、色相の感じ方が変わります。例えば同じオレンジ色でも、赤と隣り合うと、色相環で赤とは逆の方向の色(黄色・緑)を帯びて見えます。逆に黄色や緑と隣り合うと、赤味が強く見えるものなのです(図4)。

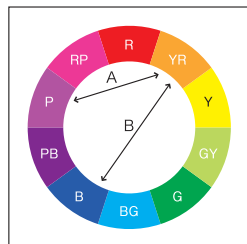


図1 色相環で異なる位置にある色を組み合わせるのが「色相対比」です。対比効果は色相環の位置が遠い色の組み合わせほど大きくなります。この例ではAの組み合わせよりも、Bの組み合わせの方が対比効果が強い配色ということになります。

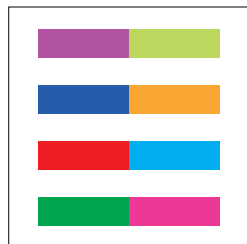


図2 色相環で対向にある色同士の色組み合わせが「補色」です。補色関係の配色は、最もコントラストが強くなるため、デザインが華やかで力強いものとなります。

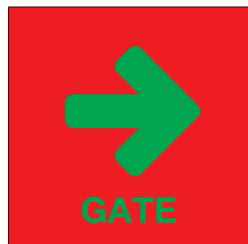


図3 補色関係の色で、彩度が高い色同士を組み合わせると、ハレーションと呼ばれる現象が起きます。文字や絵柄が見にくくなってしまいますので注意しましょう。

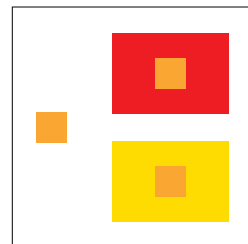
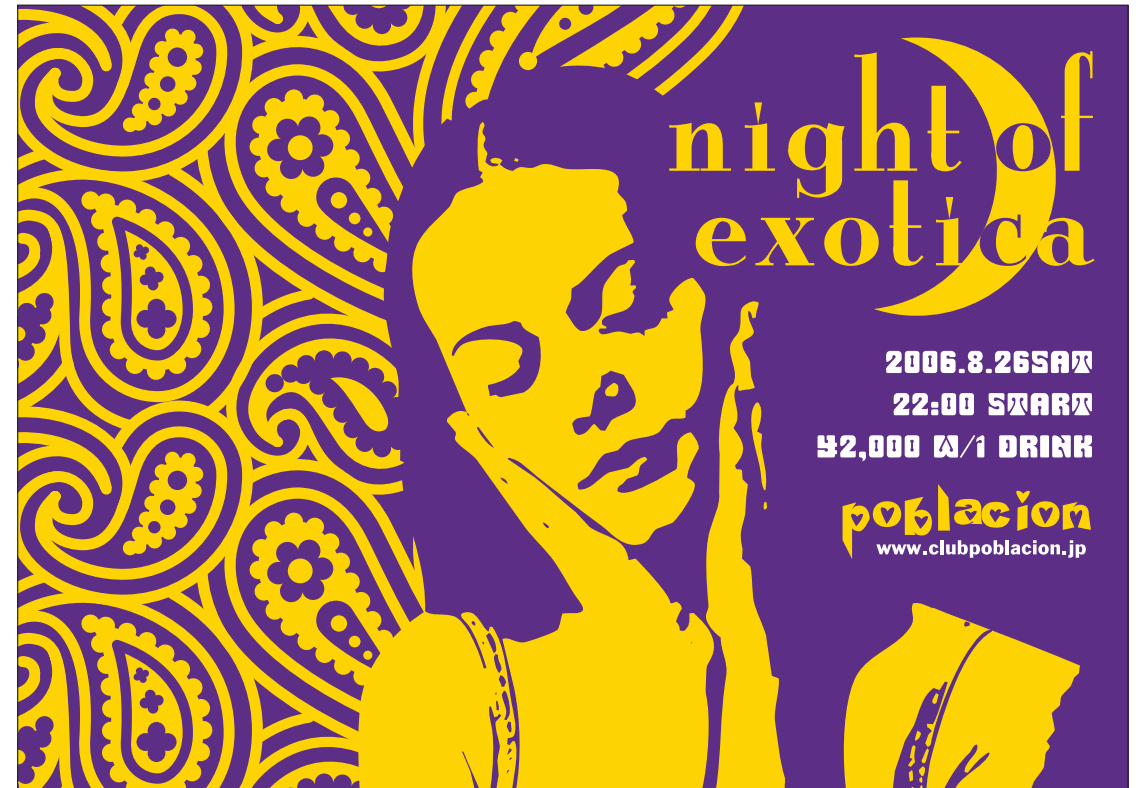


図4 同じ色でも、周囲の色によって見え方が変わります。同じオレンジ色が赤の中に配置すると黄色みを帯びて見え、黄色の中に配置すると赤みを帯びて見えるのです。

補色関係にある色相の対比を活かした、クラブのフライヤーの例です。使用している色数は少ないものの、色相の対比が強く華やかに仕上がっています。また黄色と紫の組み合わせは「夜」をイメージさせるため、クラブイベントの告知にマッチした配色だと言えるでしょう。補色同士を組み合わせただけの場合は、他にあまり色を使わない方が、センスよくコントラストを強調することができます。



Point

同じデザインで、紫の部分を変えてみましょう。茶色と黄色の組み合わせは、色相の近い配色です。そのため全体の統一感を出せますが、色相の対比が弱くなるため、上の見本のような華やかさを感じることはできません。

